韓国語における複数標識 *tul* の出現環境について
――“economy of language” と関連づけて――

禹　　昊　穎

論文要旨

本稿は、韓国語における複数標識 *tul* の意味用法について検討し、*tul* の現れる場所に焦点を当てて考察する。

tul は接尾辞、補助詞、依存名詞の三つの意味用法をもつと言われており、様々な観点から多くの研究がなされている。しかし、*tul* の出現環境をめぐるこれまでの研究においては、次のような問題は充分に検討されていない。宋錫重（1975, 1993）は、主語の直後ではない場所に現れて、その文の主語が複数であることを表わす *tul* について、〈複数標識複写〉という概念を取り上げて説明しているが、それによる文体上の変異が生ずる原因については触れられていない。また、李熙昇（1955）、任洪彬（1979）、白美鉉（2002）などは、*tul* は一つの文のほぼすべての要素に現れる、いわゆる「*tul* の最大拡張」とも呼び得る現象を認める立場を取っているが、それは果たして可能なのか。さらに、徐正洙（1996）の分析によると、主語と *tul* の連鎖が省略されていない場合、その他の要素に現れる *tul* は無駄なものとされているが、それは果たしてどうだろうか。

本稿では、以上の問題について、詳細な考察を通して、人間の言語に見られる〈経済性の原理〉と関連付けて検討する。

キーワード【韓国語、複数標識 *tul*、複写、言語の経済性、強調】

0. はじめに

数（number）とは何か、という問いに大雑把に答えるならば、ことばによって指示される外界の事物の「多少」を表す概念であるといえよう。ごく素朴な意識に則って数を区別するならば、単数（singular）と複数（plural）の識別が考えられるが[1)]、それは言語的手段の相違によって、大きく「文法的手段」と「語彙的手段」とに分かれる。前者は英語を始めとするヨーロッパ諸語であり、義務的（obligatory）にいずれかの形で言語化しなければならないといった強い制約が働いている。一方、後者は東アジア諸語に多く見られ、数の区別による言語化は随意的（optional）であるといわれており（金田一（1988））、例えば英語の「数の一致」[2)] のような制約はない。

語彙的手段によって数的異なりを表す東アジア諸語、例えば、日本語や中国語のような個別言語における〈数〉の概念に関わる研究を眺めて見ると、さほど活発には行なわれていな

いようである。しかし、韓国語における数概念についての研究は個別言語の領域にとどまらず、他言語との比較対照による研究も少なくない。おそらくそれは、韓国語の「들（*tul*）」[3]（仮に「複数標識」と呼ぶことにする）は他言語に較べ、やや変わった振る舞いをするからであろう。

日本語・中国語・韓国語における有標の人称代名詞の連鎖を考えてみると、「素性浸透の規約」（Feature Percolation Convention）[4] や「右側主要部の規則」（Right-hand Head Rule）により語全体が複数を表すことになるが[5]、日本語と中国語は例えば（以下、「*」「?」「??」は文の不適格性を表す）、

（1） a. 〔君たち〕どうして遅れて来たの？ （作例）
b. *〔φ〕[6] どうしてたち遅れて来たの？
c. *〔φ〕どうして遅れてたち来たの？
d. *〔φ〕どうして遅れて来たのたち？

（2） a. 〔你们〕怎么来晚了？ （作例）
nǐmen zěnme lái wǎn-le
PER-SUF[7] **why** **come** **late-PERF**
b. *〔φ〕怎么们来晚了？
c. *〔φ〕怎么来晚们了？
d. *〔φ〕怎么来晚了们？

のように、複数形接尾辞が前接する人称代名詞に拘束されずに、文を構成するその他の要素にまで浸透し現れることはまずない。しかし、韓国語の *tul* はそれとは趣を異にしており、日本語や中国語では決して許されない（1b）（1c）（1d）と（2b）（2c）（2d）が、（3b）（3c）（3d）に示すように許される[8]。

（3） a. 〔너희들〕왜 늦게 왔니？ （作例）
ne-huy-*tul* way nuckey wa-ss-ni
PER-SUF-SUF **why** **late** **come-PAS-INTE**
b. 〔φ〕왜들 늦게 왔니？
way-*tul* nuckey wa-ss-ni
c. 〔φ〕왜 늦게들 왔니？
way nuckey-*tul* wa-ss-ni
d. ?〔φ〕왜 늦게 왔니들？[9]

way nuckey wa-ss-ni-*tul*

このような韓国語の複数標識 *tul* の現象と関連し、李熙昇（1955）と Martin and Lee（1969）には次のような記述が見られる（以下、断りがない限り、引用文の日本語訳は引用者によるものであり、【 】で括って示す）。

> 複數를 表示하는 要素（接尾語 其他）를 이와 같이 濫用할 수 있는 것은 아마 우리 國語에서만 볼 수 있는 한가지 特徵이 아닌가 한다.　（李熙昇，1955: 282）
> 【複数を表示する要素（接尾辞）をこのように濫用することができるのは、おそらく韓国語にのみ見られる一つの特徴ではないか。】

> The word tul is uniquely versatile; it may pop up just about anywhere in a Korean sentence and it need not always refer to the words near it.
> （Martin and Lee, 1969: 32）
> 【*tul* は、非常に使い勝手の良い単語である。それは韓国語の文において、どの部分にも姿を現わすが、必ずしも近くにある単語の複数を表すわけではない。】

以上の若干の考察を踏まえて、本稿では、現代韓国語において〈複数〉の表示として用いられる *tul* の生起環境について、言語を生み出す話者の観点から少し考えてみたい。

以下、国語辞書の語釈を概観し、*tul* の意味用法について簡単に整理し、従来の研究を概観し、そこに存在する問題点を明らかにする。また、言語の経済性（economy of language）について簡単に触れておく。その上で、*tul* の出現環境について、経済性の原理（economy principle）やそれによる効果と関連付けて検討する、という順で進めることにする。

1. 辞書の記述

具体的な分析に立入る前に、その背景として、国語辞書の語釈を確認する。代表して『標準国語大辞典』と『朝鮮語大辞典』を取り挙げることにする（以下、『標準』『朝鮮』と記す）。

1.1 『標準』の語釈

韓国において国語辞書の中でも最も権威のある『標準』の語釈を概観して見ると、韓国語の *tul* は現れる場所によって次の三つに分類されている（以下、用例の日本語訳は直訳である。なお、直訳の文に「*」、「?」、「??」などの記号は付しない。下線は引用者）。

① 접사【接辞（affix）；厳密には〈接尾辞〉（suffix）である】
（셀 수 있는 명사나 대명사 뒤에 붙어）‘복수（複數）’의 뜻을 더하는 접미사.
【（数えられる名詞や代名詞の後について）〈複数〉の意味を付け加える接尾辞】

（4） 사람들　그들　너희들　사건들　（『標準』）
salam-*tul*　ku-*tul*　ne-huy-*tul*　saken-*tul*
people-SUF　PER-SUF　PER-SUF-SUF　event-SUF
人たち　彼たち　あなたたち　事件たち

② 조사【助詞（auxiliary particle）；厳密には〈補助詞〉[10] である】
（체언，부사어，연결 어미 ‘－아，－게，－지，－고’，합성 동사의 선행 요소，문장의 끝 따위의 뒤에 붙어）그 문장의 주어가 복수임을 나타내는 보조사.
【（体言・副詞語・連結語尾「*-a, -key, -ci, -ko*」、合成動詞の先行要素、文章の末尾などについて）その文章の主語が複数であることを表わす補助詞】

（5） 이 방에서 텔레비전을 보고들 있어라.　（『標準』）
i　pang-eyse　theylleypicen-ul　poko-*tul*　iss-ela
this　room-LOC　television-ACC　watch-AUP　be-IMP
この部屋でテレビを見てたちいなさい。

③ 의존명사【依存名詞（dependency noun）】
（명사 뒤에 쓰여）두 개 이상의 사물을 나열할 때，그 열거한 사물 모두를 가리키거나，그 밖에 같은 종류의 사물이 더 있음을 나타내는 말.
【（名詞の後に用いられ）二つ以上の事物を羅列するとき、その列挙したすべての事物を指したり、その他の同種の事物がもっとあることを表わす語】

（6） 과일에는 사과，배，감 들이 있다.　（『標準』）
kwail-ey-nun　sakwa　pay　kam　*tul*-i　iss-ta
fruit-DAT-TOP　apple　pear　persimmon　DEN-NOM　be-DEC
果物にはりんご、梨、柿たちがある。

上記の解釈を見てみると、『標準』は *tul* の現れる環境を重視し記述しているように思われるが、このような解釈がいつから存在していたのかについては明記されていない。また、概説書、教科書、各種辞書・事典などを調べてみても、具体的な記述は見当たらないが、紙

幅の問題もあるため、ここでは問題の指摘に留めておくことにし、稿を改めて検討することにしたい[11)]。

1.2 『朝鮮』の語釈

韓日辞書の中でも最高の辞書と目される『朝鮮』(1986: 732-733) では、*tul* について、次のように記載されている（紙幅の問題のため、用例は省く。下線は引用者)。

〈表. 1〉『朝鮮』の語釈

	語義記述
tul_2	（複数を表して）など、等
tul_4	①名詞に付き同質の個体が複数であることを表す ②おもに複数形の代名詞に付いて複数の構成員がそれぞれの意、または複数の強調を表す ③異なる個体が複数であることを表す ④抽象名詞などに付いて文の主語が複数であることを表す ⑤おもに副詞や動詞・形容詞の活用形などに付いて文の主語が複数であることを表す ⑥助詞に付き、文の主語が複数であることを表す

上記の記述を見てみると、『朝鮮』は「複数」を表わすという意味を重視し、〈接尾辞〉と〈補助詞〉とを区別せず、同様のものと見なしていると思われる。tul_2 と tul_4 の語釈を、先ほどの『標準』の 3 分類に照らし合わせ、共通する意味を便宜的にまとめると、おそらく〈表 2〉のようになる。

〈表. 2〉 *tul* の語釈のまとめ

『標準』	『朝鮮』
接尾辞	tul_4 ①②③
補助詞	tul_4 ④⑤⑥
依存名詞	tul_2

tul の用法の分類については研究者によって様々な解釈が見られるが、例えば崔鉉培 (1932, 1937/1982)[12)] は接尾辞と補助詞とを区別せず、一つのものと見なす立場を取っている。

2. 問題の所在

宋錫重 (1975, 1993) は、要素間の結合力の弱いところに浸透し現れる補助詞 *tul* について、「複数標識複写」(plural marker copying) という概念を用いて説明している。簡単に言えば、複数標識には「複写規則」[13)] が存在し、その規則によって例えば (7a) のような深層構造

（deep structure）から（7b）～（7e）のような段階へと順次適用されていく、ということである（以下、例文に日本語の直訳を付ける際、接辞 *tul* は「たち」、補助詞 *tul* は「タチ」と表記する。また、形態素単位は「PL」と記す）。

（7） a. [[사람]$_{N}$[들]$_{PL}$]$_{NP}$[[많이]$_{ADV}$ 왔군]$_{VP}$]$_{S}$ （宋錫重，1993: 36）

b. 사람들이 많이 왔군.
salam-*tul*-i manhi wa-ss-kwun
people-PL-NOM many come-PAS-EXC
人たちがたくさん来たね。

c. 사람들이 많이들 왔군.
salam-*tul*-i manh-*tul* wa-ss-kwun
人たちがたくさんタチ来たね。

d. 사람이 많이들 왔군.
salam-i manhi-*tul* wa-ss-kwun
人がたくさんタチ来たね。

e. 많이들 왔군.
manhi-*tul* wa-ss-kwun
たくさんタチ来たね。

宋錫重は、「上記の用例が同一の深層構造から導き出されるため、同義である」と述べているが、表層構造（surface structure）において（7b）～（7e）のような「文体上の変異」（stylistic variation）が生ずる原因については触れられていない。

また、李熙昇（1955）や任洪彬（1979/1998）などは *tul* の独特な現象として（下線は引用者）、

（8） a. 아이들이 텔레비전들[14] 을 너무들 좋아들 해서들 탈이다들.（任洪彬，1998: 540）
ai-*tul*-i theylleypicen-*tul*-ul nemwu-*tul* coha-*tul* hayce-*tul* thal-i-ta-*tul*
child-PL-NOM television-PL-ACC too-PL like-PL do-PL trouble-be-DEC-PL
子どもたちがテレビタチをとてもタチ好きタチでタチ問題だタチ。

b. 너희들 어서들 공부들 하고 놀아라들. （李熙昇，1955: 282）
ne-huy-*tul* ese-*tul* kongpwu-*tul* hako nol-ala-*tul*
you-PL-PL quick-PL study-PL do play-IMP-PL
君たち早くタチ勉強タチして遊びなさいタチ。

のような「*tul* の最大拡張」と呼び得る用例を取り挙げ、一つの文のほぼすべての成分にも現れ得ると述べているが、例えば任洪彬には次のような記述が続いている。

> 동일 대상에 관련하는 {들} 이 두 번 이상 출현할 때의 효과는 어떠한 것인지 몹시 불명하다. （任洪彬，1979/1998: 542）
>
> 【同一対象に関連する *tul* が二回以上現れる時の効果はどのようなものであるのかは不明である。】

この点と関連し、徐正洙（1996）は次の用例を取り挙げ（数字と下線は引用者）、

（9） 여러분들$_1$ 은 놀지들$_2$ 만 말고 공부들$_3$ 을 해요. （徐正洙，1996: 448）

yelepwun-*tul*$_1$-un nolci-*tul*$_2$-man malko kongpwu-*tul*$_3$-ul hayyo.

everyone-DEL-TOP play-DEL-just don't study-DEL-ACC do-FIP

みなさんたちは遊んでタチばかりではなく、勉強タチをしましょう。

「前の主語が省略されていない場合も、その他の要素に *tul* が添加される場合がある」と指摘しているが、(9) の *tul*$_2$ と *tul*$_3$ については、次のような説明を続けている（この一節の〔 〕は本引用者が付け加えたものである。下線は引用者）。

> "놀지들" "공부들" 의 "들" 은 군더더기이다. 주어가 생략되지 않았기에 이 "들" 은 있으나마나한 것이다. 이는 본디 앞의 주어 따위가 생략되었을 경우에 나타나는 "들" 인데〔이 경우의 "들" 은〕환경이 바뀌었는데도 임의로 남아 있는 것이라 할 것이다.
>
> （徐正洙，1996: 448）
>
> 【「nolci*tul*（遊んでタチ）」や「kongpwu*tul*（勉強タチ）」の *tul* は無駄なものである。主語が省略されていないので、この *tul* はあってもなくてもよいものである。これは元来、前の主語が省略された場合に現れる *tul* であるが、〔この場合の *tul* は〕環境が変わっても任意に残されているものである。】

要するに、「主語 *tul*」の連鎖が省略されていない場合、その他の要素に現れる *tul* は無駄なものである、ということである。しかし、(9) の *tul*$_2$ と *tul*$_3$ とを単なる *tul*$_1$ の残存（relic）と考えてよいのか、という疑問が残る。

また、李熙昇（1955）、任洪彬（1979/1998）、白美鉉（2002）などの指摘を踏まえて考えてみると、理屈の上では、

(10) 사람들이 공원에들 많이들 모여들 있다들. （作例）

salam-*tul*-i kongwen-ey-*tul* manhi-*tul* moye-*tul* iss-ta-*tul*

people-PL-NOM park-DAT-PL many-PL gather-PL be-DEC-PL

人たちが公園にタチたくさんタチ集まってタチいるタチ。

のように、*tul* は文の構造を構成するすべての要素に現れることになる。しかし、韓国語の *tul* に見られるこのような現象がどれほど一般的な現象であるのか、どれほど自然な表現であるのか。また、このように *tul* の出現環境を文を構成するすべて要素にまで拡張することによってどのような言語現象が説明できるのか、という根本的な疑問を感じる。

個別言語に見られる実現の形式と変動の範囲を単に言語事実として確認し、断片的に取り挙げるだけでは不十分であり、そのようにして確認された言語事実からどういう意味を引き出せるかという解釈を加える作業が必要であろう。本多（2013: 6-8）は、「人は基本的に、自分の観点から見えたものしか語ることができず、言語を見れば、人の観点や、捉え方が分かる。言葉を考えることは人間のものの見方の特性を考えることにつながる」と述べており、本稿では、この指摘を考慮に入れ、*tul* の出現環境と関連し、話者の事態の捉え方と効率的運用とに積極的な意義を与え、新たな解釈を与えることを試みる。

3. 小説の事例

先ず、用語について少し整理しておく。

(11) a. 사람들이 많이들 왔군. （(7c) 再掲）

salam-*tul*-i manh-*tul* wa-ss-kwun

b. 많이들 왔군. （(7e) 再掲）

manhi-*tul* wa-ss-kwu

宋錫重（1993）のいう「複写」（copying）は、(11a) のように *tul* が二つ以上現れる、いわゆる「重複 *tul* 構文」（reduplicated tul consturction）に相応しい用語であろう。厳密に言うなら、〈複写〉とは、もととなる「主語 *tul*」の連鎖が存在し、*tul* がその他の構成要素に写った場合を意味するため、(11b) のように「主語 *tul*」の連鎖が消え、*tul* がその他の構成要素に現れる場合とは性格を異にすると思われる [15)]。以下、(11b) のような *tul* を (11a) のそれと区別し、移動（movement）と呼ぶことにする。

本節では、以下の小説を資料とし、*tul* が現れている例文を採集し、それに基づいて事実関係を確認する。

〈表．3〉 資料

	作　者	出版年	作品名	「*tul*」の数
①	申京淑 安宇植（訳）	(2008) (2011)	『엄마를 부탁해』 『母をお願い』	634
②	孔枝泳 蓮池薫（訳）	(2009) (2012)	『도가니』 『トガニ』	964
③	李文烈 藤本敏和（訳）	(1987) (1992)	『우리들의 일그러진 영웅』 『われらの歪んだ英雄』	362
			合計	1960

既に触れた『標準』の語釈に従って分類すると、上記の小説からは接尾辞 1897 例、補助詞 54 例、依存名詞 9 例（計 1960 例）が見られる。以下、代表的なものを少し挙げておく（例文が長い場合は、下線部のみにローマ字表記とグロスを付ける。また日本語訳は、直訳に加えて「日本語訳本」からの訳も付ける。下線は引用者）。

(12) a. 너의 가족들은 서로에게 엄마를 잃어버린 책임을 물으며 스스로들 상처를 입었다.
（엄마，16）

ne-uy kacok-*tul*-un selo-eykey… susulo-*tul*.. sangche-lul ip-ess-ta
PER-GEN family-PL-TOP each other oneself-PL hurt-ACC get-PAS-DEC

あなたの家族たちは互いに母をなくしてしまった責任を問いながら自らタチ傷をつけた。

あなたの家族たちは互いに、オンマがいなくなった責任を押し付け合いながら、自ら傷ついていった。
（母，15）

b. 형철이가 퇴비를 걷어다가 모깃불을 피워놓으면 아우들은 평상에 아무렇게나들 뻗대고 앉아서 화덕에 얹어놓은 솥에서 찐빵이 쪄지기를 기다렸재.
（엄마，240）

… au-*tul*-un pyengsang-ey amwulehkeyna-*tul*…
younger brother and sister-PL-TOP flat bench-DAT at random-PL

ヒョンチョルが積み肥を集めてきて蚊遣り火を焚くと、弟や妹たちは寝台の上に好き勝手にタチ座り込み［…］

ヒョンチョリが積み肥を集めてきて蚊遣り火を焚くと、弟や妹たちは縁台にもなる寝台の上に好き勝手に座り込み、コンロに載せておいた釜のなかで、パンが蒸し上がるのを待ち受けたものだよ。
（母，280）

c. 엄마가 밥을 챙겨주는 동네 고양이들이 엄마 곁에 둘러앉아들 있더군.
（엄마，258）

… koyangi-*tul*-i emma kyeth-ey twulleanca-*tul* iss-te-kwun
cat-PL-NOM mother side-DAT sit round-PL be-PAS-EXC
母が餌をやってる近所の猫たちが母の傍を取り囲むようにして座ってタチいるのじゃないの。
オンマが餌をやってる近所の猫たちが、オンマの傍を取り囲むようにして群がっているじゃないの。（母，301-302）

d. 아마도 점심자리에 혼자 나타난 그에게 그들은 아내는 어디 갔느냐고들 물을 것이었다.（엄마，270）
ku-eykey ku-*tul*-un anay-nun eti ka-ss-nunya-ko-*tul* mwulol
he-DAT they-PL-TOP wife-TOP where go-PAS-INTE-COM-PL ask
きっと昼食の席へ一人で現れた彼に、彼たちは妻はどこに行ったのかとタチ問いかけるはずだった。
きっと昼食の席へ一人で現れた彼に、彼らは妻はどうしたのかと問いかけるはずだった。（母，316）

e. “참 이상해. 예쁘고 똑똑하고 괜찮은 여자들은 꼭 이상한 놈 만나서 고생들을 해”（도가니，19）
yeca-*tul*-un kkok isanghan nom mannase kosayng-*tul*-ul hay
woman-PL-TOP strange guy meet hard life-PL-ACC do
「本当に変だな。きれいで賢くてよい女たちは必ずろくでもないやつに出会って苦労タチするんだから。」
「変なもんだな。きれいでしっかりした女に限ってろくな男にめぐり会えず、苦労するんだから」（トガニ，16）

f. 아마 그분들의 백이 대단들 하신가봅니다.（도가니，146）
ama kupwun-*tul*-uy payk-i taytan-*tul* ha-si-nkapo-pnita
probably the man-PL-GEN backing-NOM great-PL SUF-HNR-seem-HNR
おそらくあの方たちのバックがすごいタチでしょうね。
おそらくあの方々のバックにはかなりの人たちがいるのでしょうね。
（トガニ，135）

（12）は *tul* が二回現れている例文であるが、「主語 *tul*」の連鎖が残っている場合、複写は文中に一回のみであることが見て取れよう。また、（13）のような「主語 *tul*」の連鎖が消え、文の構成要素に移動し現れる例文を見ても同様のことが言える。こういうことを示唆する事例を、若干以下に挙げておく。

(13) a. …먹을 것은 어찌 그리 금세 안다냐들! (엄마, 24)

mekul kes-un ecci kuli kumsey anta-nya-*tul*

eat DEN-TOP how that way at once perceive-EXC-PL

…食べものはどうしてそんなにすぐわかるだろうタチ！

…食べることになるとどうしてこうも、すぐにわかっちまうんだろうねえ！

(母, 24)

b. 호박된장 하나 끓여줘도 맛나게들 먹고, …… (엄마, 75)

hopak toyncang hana kkulhye-cwe-to masnakey-*tul* mekko

pumpkin beanpaste potage one boil-give-and delicious-PL eat

カボチャのお味噌汁を炊いてやっても美味しくタチ食べて、……

カボチャを入れたおみそ汁を一つ炊いてやったって、そりゃあ美味しそうに口へ運んでいたし、…… (母, 84)

c. 이리들 와 봐! (엄마, 107)

ili-*tul* wa pwa

here-PL come try

こっちタチ来てみな！

こっちに来てみな！ (母, 122)

d. 어째 그리 똑같은 공간에서들 살재? 각자 다르게 생긴 집에서들 사는 게 좋을 것 같어. (엄마, 200)

kongkan-eyse-*tul* sal-cay… cip-eyse-*tul* sanun key cohul kes kath-e

room-LOC-PL live-INTE home-LOC-PL live seems to be good-FIP

どうしてそんなにそっくりの空間でタチ暮らしているのかな？各々違う造りの家でタチ住んだ方がよさそうに思うよ。

どうしてあんな具合に、そっくりの空間でばかり暮らしているのかねえ？おのおの造りの違う家なんかに住んでみたら、よさそうに思うんだよ。 (母, 232)

e. 어찌나 먹성들이 좋은지. (엄마, 240)

eccina mekseng-*tul*-i cohun-ci

so appetite-PL-NOM good-FIP

なんとまあ食べっぷりタチがよかったことか。

なんとまあ、子どもらの食べっぷりのよかったことか。 (母, 280)

f. 어쩌면 그렇게들 잠도 안 자고 전화를 해? (도가니, 272)

eccemyen kulehkey-*tul* cam-to an cako cenhwa-lul hay

what so-PL sleep-AUP not sleep phone-ACC do

どうしてそんなにタチ寝ないで電話をするの？

夜も寝ないで電話ばかりしてきたわね。（トガニ、283）

g. “그래, 그동안 기분들이 어땠어 ?”（영웅, 70）

kulay kutongan kipwun-*tul*-i ettay-ss-e

oh the while feeling-PL-NOM how-PAS-INTE

「そうか。そのあいだ気分タチがどうだった。」

「そうか。そのあいだどんな気持だったか」（英雄, 87）

以上のような例文からも十分に理解できる通り、従来の研究において取り挙げられている *tul* の例文は、韓国語の *tul* が如何に違うかをことさらに強調するための作為が深く入っているということになる。この点を念頭に置いて、次節では、我々の言語生産の過程の背後に存在する原理について具体的に検討する。

4. 言語の経済性について

前節で取り挙げた文学作品に加えて新聞記事などを調べてみても、例えば (14) のように、一つの文のほぼ全ての要素に *tul* が現れる例文は見当たらず、さらに言うならば、

(14) a. ?? 아이들이 텔레비전들을 너무들 좋아들 해서들 탈이다들.（(8a) 再掲）

ai-*tul*-i theylleypicen-*tul*-ul nemwu-*tul* coha-*tul* hayce-*tul* thalita-*tul*

b. ?? 너희들 어서들 공부들 하고 놀아라들.（(8b) 再掲）

ne-huy-*tul* ese-*tul* kongpwu-*tul* hako nol-ala-*tul*

筆者の判断では自然さがかなり落ちる印象を受ける[16]。おそらくそれは、「人間は労力をできるだけ少なくして最大の効果を得ようとする」傾向があるからであろう。この点は、Carroll and Tanenhaus（1975）の“Mini-Max Principle”にも記されている。

> The speaker always tries to optimally minimize the surface complexity of his utterances while maximizing the amount of information (underlying structure) he effectively communicates to the listener.（Carroll and Tanenhaus, 1975: 51）

要するに、話し手は常に発話量を最小化し、同時に聞き手への情報量は最大化しようとする、ということである。この点を念頭に置いて、我々の言語生産の過程の背後に存在する経済性の原理について、もう少し具体的に見てみよう。

人間の言語に共通した一般的な原理の一つに経済性（economy）と呼ばれる原理があって、

それは様々な領域で用いられている。例えば、アメリカの構造言語学の Sapir（1921）は経済性について（下線は引用者）、

> [...] all language have an inherent tendency to economy of expression, Were this tendency entirely inoperative, there would be on grammar. （Sapir, 1921: 39）
> すべての言語には、本来、表現の経済に向かう傾向がある。この傾向が全然作用しないとすれば、文法など存在しないだろう。 （安藤（訳），p. 68）

と述べ、経済性は言語の文法の成立にとって不可欠なものである、という説明をしている[17)]。また、機能主義言語学の Martinet（1962, 1970）は、「意思伝達の必要性」と「最小労力の原理」とが言語変化の要因になるとし、言語の経済性（economy of language）について次のように述べている（下線は引用者）。

> In order to understand how and why a language changes, the linguist has to keep in mind two ever-present and antinomic factors: first the requirements of communication, the need for the speaker to convey his message, and, second, the principle of least effort, which makes him restrict his output of energy, boht mental and physical, to the minimum compatible with achieving his ends. （Martinet, 1962: 139）
> 言語がどのように変化し、なぜ変化するかを理解するためには、言語学者は、常に存在し相反する二つの要因を心にとめなければならない。すなわち、その一つは、伝達が要求するもの、つまり、話し手が自分の伝達内容を伝える必要性、もう一つは、最少労力の原理、つまり精神的および肉体的エネルギーの発出を、自分の目的の達成をそこなわないかぎり、最少限に止めさせる傾向である。 （田中・倉又（訳），p. 154）

> L'évoloution linguistique peut être conçue comme régie par l'antinomie permanente entre les besoins communicatifs de l'homme et sa tendance à réduire au miminum son activité mentale et physique.
> A chaque stade de l'évoloution, se réalise un équilibre entre les besoins de la communication qui demandent des unités plus nombreuses, plus spécifiques, dont chacune apparaît moins fréquemment dans les énoncés, et l'inertie de l'homme qui pousseà l'emploi d'un nombre restreint d'unités de valeur plus générale et d'emploi plus fréquent.
> Ce qu'on peut appeler l'économie d'une langue est cette recherche permanente de l' équilibre entre des besoins contradictoires qu'il faut satisfaire :...

（Martinet, 1970: 176-178）

人間には通信しようという要求があるいっぽうで、心と体の活動を最小限に切りつめようとする傾向があるけれども、［…］通信の要求は、単位をふやし、もっと特殊なものにし、その一つ一つが言表のなかにあらわれる頻度をもっと少なくしようとするし、人間の惰性は、価値がもっと広く、使用が頻繁な、限られた数の単位をと使おうとさせるのである。［…］言語の経済と呼べるものは、矛盾した要求を満足させ、そのあいだにいつも均衡を求めつづけることである。（三宅（訳），pp. 245-248）

要するに、人間には常に正確な伝達をしたいという欲求がある一方、発話に際しては精神的・身体的な活動を最小限にしようとする傾向があり、それが言語変化の要因になる、ということである。このような Martinet の一節について三輪（2014: 15）は（下線は引用者）、

マルティネのいう言語の経済性という主張の裏には、均整のとれた言語の体系こそ理想的、経済的、つまり効率のよいコミュニケーションの手段であるという理論的背景がある。

と解釈している。Martinet の記述や三輪の「効率のよいコミュニケーション」という解釈から、機能と構造の両面に見られる経済性は、実は、人間の関わりは不可欠な要素であり、何らかの目的とそれを達成する手段の最小化による言語変化といえよう。

このような経済性の原理は、（15b）～（15d）のような *tul* の移動によって生ずる「文体上の変異」にも深く関わっていると思われる。例えば、

（15） a. 사람들이 공원에 많이 모여 있다. （作例）

salam-*tul*-i kongwen-ey manhi moye iss-ta

people-PL-NOM park-DAT many gather be-DEC

人たちが公園にたくさん集まっている。

b. 공원에들 많이 모여 있다.

kongwen-ey-*tul* manhi moye iss-ta

公園にタチたくさん集まっている。

c. 많이들 모여 있다.

manhi-*tul* moye iss-ta

たくさんタチ集まっている。

d. 모여들 있다.

moye-*tul* iss-ta

集まってタチいる。

のような要素の省略による「文体上の変異」は、言語の機能・運用の過程において、労力を最小化しようとする、いわば、言語の統合的（syntagmatic）な側面における経済性の原理が働いていることは確かであろう。この点は、Martinet（1962: 139-140）のいう“basic principle of language economy”（「言語経済の基本的原理」）、即ち“...the amount of energy spent toward linguistic ends will tend to be proportionate to the amount of information to be conveyed.”（「言語使用の目的に沿って費やされるエネルギーの量は、伝えるべき情報の量と釣合う傾向がある」（田中・倉又（訳），p. 154））という記述からも容易に見て取れよう。

5. 反経済性条件

本節では、一つの文において *tul* が二回現れる場合について少し考えて見たい。

Saussure（1916: 23）は「言語現象はたえず二面を呈する」（小林（訳），p. 19）という。この一節は、おそらく経済性原理にも適用されると思われる。経済性と対を成すもの、それは、例えば Kato（2008）の言う「反経済性条件」（Anti-Economy Condition）から検討することができよう。

（16） Anti-Economy Condition
Economy condition may be violated, only if its violation leads to a new effect that is otherwise not obtained. （Kato, 2008: 42）

要するに、経済性が破られるのは、何らかの新たな効果をもたらすときにのみ許される、ということである。この反経済性の条件を背景にし、徐正洙（1996）の指摘について少し考えてみたい。

（17） a. 여러분들$_1$ 은 놀지들$_2$ 만 말고 공부들$_3$ 을 해요. （（9）再掲）
yelepwun-*tul*$_1$-un nolci-*tul*$_2$-man malko kongpwu-*tul*$_3$-ul hayyo.

b. 너희들$_1$ 왜들$_2$ 늦게 왔니？ （作例）
ne-huy-*tul*$_1$ way-*tul*$_2$ nuckey wa-ss-ni
PER-SUF-PL why-PL late come-PAS-INTE
あなたたちどうしてタチ遅く来たの？

（17）は厳密に言うと、Martinet のいう「最小労力の原理」に違反するものである。（2 節で触れた）徐正洙の指摘によると、（17a）の tul_2 と tul_3、（17b）の tul_2 は、主語と tul_1 が存在するため、単なる残存と解されてしまうが、これまでの議論を踏まえて、話者の言語化する過程を考えてみると、無駄な労力を使うはずはない。先ほどの「反経済性条件」を念頭に置いて、例えば（17b）について考えてみると、tul_2 あってもなくてもよい無駄なものではなく、それによって何らかの効果が得られていると解せるであろう。

6. 強調について

本節では、*tul* の複写と *tul* の移動による「効果」について、強調（emphasis）という概念と関連付けて少し考えてみたい。

強調は、Underwood（1890）、Ramstedt（1939）に取り挙げられているが（注 11 参照）、それについての具体的な説明はなされていない。また、これまでの補助詞 *tul* に関する研究を概観してみても、さほど重要視されておらず、そのため、ここで改めて強調という概念を取りあげ、それについて話者の立場から考えてみることにする。

本稿では、強調とは何らかの意図（intention）の現れであると考えている。ここで、意図という視点を持ち出すならば、それは必然的に話者の立場からの考察となる。意味というのは、言語形式の内部にのみ存在するのではなく、実際には、言語形式の内部ではない方の意味というものもあり、話者の意図はその一つとして考えられる。このように考えてくると、強調という概念は話者側にその所在を求めることができ、話者の事態に対する積極的なはたらきによって生じ、言語化とともに現れる[18]。

強調について考える際、權在一（1987, 1992）、許雄（1975）は大変よい出発点を提供してくれる。權在一（1992）は、強調を文法的観念であると述べ、それを強調法（emphatic）と規定し、その概念を次のように説明している（下線は引用者）。

강조법은 전달되는 언어내용에 대하여 <u>화자가 강조의 태도를 나타내는</u> 문법범주 이다.

（權在一，1992: 190）

【強調法は伝達される言語内容について、<u>話者が強調の態度を表す</u>文法範疇である】

即ち、強調は話者側に存在することを示唆しており、これは本稿の「話者の意図」にその意味を求めることと相通じるところがあろう。韓国語における強調の表し方には「音韻的、語彙的、派生的、屈折的、統辞的」[19] の五つが存り、*tul* の付与と関連するのは、派生的な方法である。これまでの考察を踏まえて考えてみると、強調を実現するには「何らかの有標的な要素を付け加える」という操作が必要となる。例えば、

(18) 너희들 왜 늦게 왔니？ ((3a) 再掲)
ne-huy-*tul* way nuckey wa-ss-ni

の例文からパラフレーズされる (19) は、「有標的な要素を付け加える」という観点から考えて見ると、

(19) a. 〔φ〕왜들 늦게 왔니？ ((3b) 再掲)
way-*tul* nuckey wa-ss-ni
b. 〔φ〕왜 늦게들 왔니？ ((3c) 再掲)
way nuckey-*tul* wa-ss-ni
c. 〔φ〕왜 늦게 왔니들？ ((3d) 再掲)
way nuckey wa-ss-ni-*tul*

(19) の *tul* は前節する要素を強める効果をしていると考えられる。ここで、実際に *tul* が用いられた具体的な言語使用の場面や状況を取り入れて考えて見よう。例えば[20]、

(20) a. 야！오늘들 왜 그래？ (TV：일박이일，2013/5/12)
ya onul-*tul* way kulay
VOC today-PL why EXC
今日タチどうしたの？
b. 정말 약속들이 없으셨나 봐요. (TV：톡투유，2015/5/31)
cengmal yaksok-*tul*-i epsu-si-ess-na pwa-yo
really promise-PL-NOM have no-HNR-PAS seem-FIP
本当に約束タチがなかったみたいですね。

(20a) は普段とは異なる行動をする人々に対して用いた表現であり、(20b) は番組の司会が大勢の観客に向けて言った冗談めいた表現である。(20) の *tul* は、「主語 *tul*」の連鎖が消え、文の構成要素に現れる例文であるため、前接する要素の複数ではなく、文の主語が複数であることを表す。つまり、(20a) の *tul* は「onul (今日)」の複数ではなく、また、(20b) の *tul* も「yaksok (約束)」[21] の複数ではないということである。

この二つの用例について、既に触れた「言葉を考えることは話者のものの捉え方を考えることにつながる」ということを念頭に置いて考えてみよう。例えば (20a) の *tul* は、一つの出来事に関与する参与者が複数であるという点を浮上させるはたらきをしていると思われるが、さらに一歩立ち入って考えてみると、(20a) は「onul (今日)」に *tul* を付与するこ

とによって「今までこのようなことがなかったのに、今日に限って」という話者の事態に対する強い意図が加わっていると解すことができる。また（20b）は、「yaksok（約束）」に *tul* を付与することによって「もし皆さんに約束があったなら来なかったのかもしれないが、約束がなかったのでこの会場に来たでしょう」という意味が含まれることになると思われる。以上の考察を通して窺えることは、事態を捉えて言語化する際に、話者が特別な関心を寄せるところに *tul* を付与する、ということである。また、先ほどの（20）は、

（21） 야！오늘 왜들 그래？ （作例）
ya onul way-*tul* kulay
VOC today why-PL EXC
今日どうタチしたの？

のようにパラフレーズすることも可能である。このような場合の *tul* は、話者が事態に内在する複数の参与者が普段とは様子が違うと判断し、「その理由を強く問い求める」ようなはたらきをすると思われる。このように考えてくると、例えば、

（22） a. 어찌나 먹성들이 좋은지. （（13e）再掲）
eccina mekseng-*tul*-i cohun-ci
b. 어쩌면 그렇게들 잠도 안 자고 전화를 해？ （（13f）再掲）
eccemyen kulehkey-*tul* cam-to an cako cenhwa-lul hay
c. “그래，그동안 기분들이 어땠어？” （（13g）再掲）
kulay kutongan kipwun-*tul*-i ettay-ss-e

のような用例や先ほどの（19）も何らかの形で説明がつく。即ち、事態をことばで切り取って言語化する際、話者が特別な関心を寄せた要素に *tul* を付与する、ということである。また、従来の研究に従うと、

（23） a. 형철이가 퇴비를 걷어다가 모깃불을 피워놓으면 아우들$_1$은 평상에 아무렇게나 들$_2$ 뻗대고 앉아서 화덕에 얹어놓은 솥에서 찐빵이 쪄지기를 기다렸재.
（（12b）再掲）
au-*tul*$_1$-un pyengsang-ey amwulehkeyna-*tul*$_2$...
b. 엄마가 밥을 챙겨주는 동네 고양이들$_1$이 엄마 곁에 둘러앉아들$_2$ 있더군.
（（12c）再掲）
koyangi-*tul*$_1$-i emma kyeth-ey twulleanca-*tul*$_2$ iss-te-kwun

c. “참 이상해. 예쁘고 똑똑하고 괜찮은 여자들$_1$은 꼭 이상한 놈 만나서 고생들$_2$을 해” ((12e) 再掲)

yeca-*tul*$_1$-un kkok isanghan nom mannase kosayng-*tul*$_2$-ul hay

のように、「主語 *tul*$_1$」の連鎖が消えない場合の *tul*$_2$ は、「無駄なもの、効果のわからないもの」と解釈されてしまうが、これまでの議論からも窺える通り、*tul*$_2$ は決して無駄なものではなく、「その要素に対する話者の特別な関心の現れである」と解することができる。

このような考察を背景にして考えてみると、*tul* の複写と *tul* の移動について、次のような結論に至るのではないか。

(24) 言語場における話者にとって特別な関心が寄せられる要素に付与する。

このような結論から、名詞や代名詞以外の場所に付与する *tul* は、経済性原理と強調とが融合された結果である、ということが言えるのではないか。さらに言うならば、Martinet (1962: 136) のいう “a language changes because it is used.” ということとも相通じるところがあろう。

7. むすび

本稿は、韓国語における複数標識 *tul* の出現環境について考察した論稿である。本稿を閉じるに際し、これまでの議論を見直し、今後の課題として残された問題について簡単に触れ、稿を結びたい。

本稿では、辞書の語釈に基づいて *tul* の意味用法をまとめ、*tul* の出現環境をめぐる従来の研究を概観し、そこに見られる問題点を提示した。話者指向の立場から *tul* の出現環境について一歩踏み込んで分析し、「経済性原理」と「強調」と関連付けてやや詳細に考察してきた。分析に際しては、「主語 *tul*」の連鎖の有無を基準に「複写」と「移動」とに分けて考察した。本稿の考察によって、*tul* の複写や *tul* の移動、そして文体上の変異について、何らかの形で説明ができたと思われる。徐正洙 (1996) や任洪彬 (1979) の記述によると、複写による *tul* は「無駄なもの」もしくは「効果のわからないもの」と解釈されてしまうが、本稿の議論からすると、それは話者の特別な関心の現れであるということになる。

tul の付与には、様々なことが関わっており、また、*tul* の生起環境を考えるためには、様々な要因を考慮しなければならないが、本稿の事例分析や考察を通じて得られた知見により、*tul* の生起環境について、従来よりも精度の高い分析・考察が達成できるような道筋が得られたのではないか。現に、個人の *tul* の使用範囲や使用頻度にも差があることは容易に予想

されるため、実証的に検証することは容易な作業ではないが、多くの事例を採集し、さらに考察を深める必要性があると思われる。

注

1） 数の区別は、単数と複数の二項的体系に限られるわけではなく、松本（1993: 37-38）によると、「単数・双数（dual）・複数」の三項的な数体系をもつ言語（アラビア語、オセアニア諸言語やアメリカの諸言語）や、「単数・双数・三数（trial）・複数」の四項的な数体系をもつ言語（ポリネシアのフィジー語）も存在すると述べられている。

2） 大江（1972）参照。

3） 本文や用例の韓国語表記は、Yale 式ローマ字表記法を用いる。

4） これは「語を構成するある要素が語全体の中心であるならば、語とその要素は共通した素性をもっていなければならない」（伊藤，2010: 105）という規約である。Feature Perc-olation Convention についての詳細は Williams, E. 1981. “On the Notions ‘Lexically Related’ and ‘Head of a Word’,” *Linguistic Inquiry* 12, 245-74 を参照されたい。

5） 韓国語の一人称複数形 *wuli* は除く。

6） ここでの‘φ’は、（宋錫重（1975: 77）の言葉を借りると）複数標識複写（plural marker copying）により生ずる「空所」を表す。

7） 以下、断りがない限り、用例に用いられる *tul* の形態素単位は、便宜的に『標準国語大辞典』の分類に従って付す。

8） 各用例に形態素単位を付した。形態素単位は、次のような「略号」を用いる。

略号	形態素単位	略号	形態素単位
ACC	ACCUSATIVE 対格	IMP	IMPERATIVE 命令文・命令文語尾
AUP	AUXILIARY PARTICLE 補助詞	INTE	INTERROGATIVE 疑問文・疑問文語尾
COM	COMITATIVE 共格	LOC	LOCATIVE 場所格
DAT	DATIVE 与格	NOM	NOMINATIVE 主格
DEC	DECLARATIVE 平叙文・平叙文語尾	PER	PERSONAL PRONOUN 人称代名詞
DEL	DELIMITER 限定詞	PERF	PERFECT 完了
DEN	DEPENDENCY NOUN 依存名詞	PAS	PAST TENSE 過去時制
EXC	EXCLAMATIVE 感嘆文・感嘆文語尾	SUF	SUFFIX 接尾辞
FIP	FINAL PARTICLE 終助詞	TOP	TOPIC 話題
GEN	GENITIVE 属格	PL	PLURAL 複数
HNR	HONORIFIC 尊敬語	VOC	VOCATIVE 呼格

9） 白美鉉（2002: 73）は、*tul* は疑問文語尾や命令文語尾の直後にも付与し得ると述べているが、筆者が調べた限りにおいては、やや許容度が下がる（禹昊穎（2015e））。

10） 日本語の「副助詞」に相当する。

11） ちなみに、筆者の文献調査（『歴代韓國文法大系』参照）が及んだ限りにおいては、補助詞 *tul* の初出例は Ridel（1881）に求めることができ、例えば次のような例文が見られる（古い韓国語表記は現代語に変更、下線は引用者）。

나하고아버지하고어머니하고동생하고누님하고아기하고잘들잇다 .
na-hako apeci-hako emeni-hako tongsayng-hako nwunim-hako aki-hako cal-*tul* is-ta.
I-and father-and mother-and borther(sister)-and elder sister-and baby-and well-PL be-DEC
私とお父さんとお母さんと弟（妹）と姉と赤ちゃんとよくタチいる。

Ridel の後の *tul* に関する代表的な研究としては、Underwood（1890）、Ramstedt（1939）がある。Underwood には（下線・強調は引用者）、

At time however, either for the sake of **emphasis** or to avoid **ambiguity**, it is desirable to express a **plural idea**; and this may be done by the use of the particle 들 affixed to the nouns, to which in turn may be affixed any one of the postpositions.

This particle 들 may also be used without the noun, and is then generally affixed to an adverb in the sentence, and gives a **plural idea**. （Underwood, 1890: 27）

ような記述が見られる。すなわち、*tul* は複数観念の強調やあいまい性を避けるために用いられると記されており、これは Ramstedt（1939）の“idea of plurality”という考えにもつながっていると思われる（下線・強調は引用者、斜体は原文のまま）。

The Korean *noun expresses the* universal or *general idea* of the corresponding thing; i.e. it has no articles and no numbers, e.g. *salam* ‘a man, men, the man, the men’, [⋯] *i salam*, ‘this (particular) man, these men’. By constructing a compound, the Korean language expresses the plural if stress is laid on the ***idea of plurality***. Thus one can add as the last word the noun *tɨl* ‘all, several, together’, and speaking of human begins, also *ne*. Thus *salam* ‘man’ or ‘men’ has the “plural” *salamtɨl* ‘men-all’ *salam-ne*, and **more strongly stressing**, *salam-netɨl* or *salam-dɨlle*. [⋯] Used this *way*, *tɨl* and *ne* may be called “plural signs”, [⋯]
（Ramstedt, 1939: 35）

上記の引用文からも分かるように、Ramstedt（1939）は、「salam（人）」は無標形で複数性の観念を表しうるため、*tul* を付与するのは、強調のために用いると指摘している。

12） 幅広い視野と創見に富む研究者として知られる崔鉉培（1932, 1937/1982）は、*tul* の用法について次のように述べている（この一節の〔 〕は原文から補足したものである）。

“들”에는 두 가지가 있다. 하나는 뒷가지로서의 “들”이니 , 위의 보기〔사람들, 집들, 포기들〕와 같이, 이름씨의 씨몸（語軀）에 붙이어 쓰히어, 독립한 씨의 자격을 가지지 못하는 것이요, 또 하나는 완전한 씨의 자격을 가진 것이니, 이는 영어의 etc, 일본말의 など에 상당한 것인데, 다른 씨의 씨몸（語軀）에 붙이어 쓰이지 아니하고, 독립적으로 쓰히느니라.
（崔鉉培, 1932: 155, 1937/1982: 218-219；引用は後者による）

【*tul* には二つがある。一つは、接尾辞としての *tul* であり、「salam*tul*（人たち）、cip*tul*（家たち）、phoki*tul*（株たち）」のように名詞の語躯に付いて用いられるため、独立した「語」の資格を有することができないものである。もう一つは、完全な「語」の資格を有するものである。これは英語の etc や日本語の「など」に相当するものであり、他の「語」の語躯に付いて用いられ

るのではなく、独立的に用いられる。】

要するに、*tul* には、自立形態素の資格を有しない拘束形態素（bound morpheme）の *tul* と自立形態素（free morpheme）の資格を有する *tul* とがあるということである（崔鉉培は、後者に関しては〈依存名詞〉という用語を用いてはいないが、以下、仮に依存名詞と記す）。依存名詞に関しては、さらに次のように説明している（下線は引用者）。

개, 소, 말, 들;
의 “들” 은 독립한 씨이니, 그 나머지를 낱낱이 열거 (列擧) 하지 아니하고, 다만 이 따위 것들이 더 있음을 보이는 것이니라. 그러나, 어떤 경우에는, 이 “들” 이 그 앞에 적힌 여러 가지의 사물을 도로 가리키는 일이 없지 아니하지마는, 이러한 경우에는 아예 “들” 을 쓰지 아니함이 좋으니라, 곧
갑, 을, 병, 들이 있더라.
에 대하여 보건대, 만약 거기 있는 사람이 갑, 을, 병, 뿐이거든, “들” 을 쓰지 아니하는 것이 옳고; 만약 갑, 을, 병, 밖에 또 다른 사람이 있거든, “들” 을 써서 그 밖에 또 사람들이 있음을 나타냄이 옳으니라.　（崔鉉培, 1932: 155, 1937/1982: 219；引用は後者による）

【「kay（犬）、so（牛）、mal（馬）、*tul*」の *tul* は独立した「語」で、その他を一つ一つ列挙するのではなく、ただこのようなものがもっと存在することを表す。しかし、ある場合には、この *tul* がその前に書かれているいろんな事物を再び指すことがなくはないが、このような場合には *tul* を用いない方が良い。例えば、「kap（甲）, ul（乙）, pyeng（丙）, *tul*i isstela（甲、乙、丙、たちがいた）」に関して言えば、もしそこにいる人が「甲、乙、丙」のみの場合は *tul* を用いない方が正しく、「甲、乙、丙」の他に人がいる場合は、*tul* を用いてその他の人がいることを表した方が正しい。】

上記は、簡単化して言えば、開放列挙（open enumeration）の場合にのみ *tul* を用いるという指摘であるが、現在は『標準』の記述のように閉鎖列挙（closed enumeration）にも用いられる。

13）宋錫重（1993）の複写規則は以下のようである（Y は〈変項〉（variable））。

（Ⅰ）　# NP, PL, (X), Y, Z # → 1, ϕ , (3), 4+2, 5　（宋錫重, 1993: 36）
　　1　2　3　4 5
　　Y=PRT, COMP, CONJ, ADV ect

（Ⅱ）　#　W, $\begin{matrix}\text{PL}\\ \text{NP-PL}\end{matrix}$　(X), Y + PL,Z #　→　1, ϕ, 3, 4, 5
　　1　2　　3　4　　5
　　where W may be　null and Y as specified adove

さらに（Ⅰ）の規則には、次のような「注 6」（p. 37）を付けている。

…한가지 확실한 사실은 이같은 법칙이 한국어문법에 존재한다고 가정하지 않고서는 복수표지의 그같은 특징을 설명할 길이 없다는 것이다 .
【一つ確かな事実は、このような法則が韓国語文法に存在すると仮定しないと、複数標識のそのような特徴は説明できない】

しかし、このような図式を導入することでどういう特徴が説明できるのか、筆者にはよくわか

らない。

14） 任洪彬（1998: 540）は、「「theleypicen（テレビ）」は複数化され得る対象ではあるが、文脈からみると、この *tul* は「（子ども）」の複数と関連する」と述べている。

15） 任洪彬（2000）は「直接複数」と「間接複数」という用語を用いており、前者は体言の後について複数的な意味を付与するものを指し、後者はその他のの場所に現れ、主語が複数であることを表わす *tul* を指す。

16） 150 人の韓国語母語話者を対象に（14）の適格性を尋ねてみたところ、非文に近い結果が得られた（禹昊穎（2015e））。

17） サピアの経済性の概念については、加藤（1999）を参照。

18） 禹昊穎（2015c: 263）参照。

19） 權在一（1992: 196）参照。

20） 韓国のバラエティー番組「일박이일（一泊二日）：293 回」（2013 年 5 月 12 日放送：KBS）、「김제동의 톡투유（キムジェトンのトークトゥユー）：5 回」（2015 年 5 月 31 日放送：JTBC）より。

21）「yaksok*tul*（約束タチ）」の *tul* は、「yaksok（約束）」の複数を表わす場合もあるが、状況から見ると、（20b）の *tul* は主語が複数であることを表わす。これと関連し、例えば『朝鮮』（1986: 733）は、「학생이 모두 조용히 책들을 읽고 있다【学生がみんな静かに本たちを読んでいる】」の文は「학생（学生）が複数であることと책（本）が複数であることの両意を持つが発話者の印象としてはやはり학생（学生）の複数が優先するようである」と述べている。

参考文献

・本文で言及した文献を「韓文」「和文」「欧文」「辞書類」に分けて揚げる。

［韓文文献］

高永根（1972）「現代國語의 接尾辭에 대한 構造的 研究（1）—確立基準을 중심으로」『ソウル大學校論文集』18, pp. 71-101.

高永根（1989）『國語形態論研究』서울대학교출판부.

高永根・具本寛（1989）『우리말문법론』집문당.

權在一（1987）「강조법과 그 실현방법」『인문과학논총』19, pp. 57-73.

權在一（1992）『한국어 통사론』民音社.

金敏洙・河東鎬・高永根（編）（1979）『歴代韓國文法大系』塔出版社.

金英熙（1976）「복수표지 “들” 의 문법」『文法研究』3, pp. 23-54. 塔出版社.

白美鉉（2002）「한국어 복수 의미 연구」『담화와 인지』9-2, pp. 59-78.

徐正洙（1996）『수정증보판 국어문법』漢陽大学校出版院.

宋錫重（1993）『한국어 문법의 새 조명』지식산업사.

李周行（1988）『한국어 의존 명사 연구』한국문화사.

李熙昇（1955）『國語學概說』民衆書舘.

任洪彬（1979）「복수성과 복수화」『韓國學論叢』2, pp. 179-218.〔任洪彬（1998: 515-548）に再録、本文中の引用は 1998 による〕

任洪彬（1989）「統辭的 派生에 대하여」『語學研究』25-1, pp. 167-196.

任洪彬（1998）『국어문법의 심층 2』太學社.

任洪彬（2000）「복수표지 ‘들’ 과 사건성」『애산학보』24, pp. 3-50.

崔鉉培（1932）「이름씨（名詞）의 細説（上）」『한글』1-4，pp. 151-155.
崔鉉培（1937）『우리말본』延禧專門出版部，〔崔鉉培（1982）『깁고 고친 우리말본（아홉번째 고침）』正音社，本文中の引用は正音社版による〕
許　雄（1975）『우리 옛말본』샘문화사.

［和文文献］

伊藤徳文（2010）「語のかたち」，石黒昭博・山内信行・赤楚治之・北森利治・菊田千春・伊藤徳文・須川精致・川本裕未（編）『現代の言語学』重版（初版：1996），金星堂，pp. 85-108.
禹昊穎（2014）「韓国語における『*ul*』格名詞句の重出をめぐって―事実関係を再考する―」『人文科学論集』23，pp. 1-40.
禹昊穎（2015a）「東アジア諸語の発想と表現―「スル」的言語と「ナル」的言語をめぐって―」『人文』13，pp. 57-79.
禹昊穎（2015b）「東アジア諸語における〈数〉に関する発想と表現―名詞の単数と複数をめぐって―」『學習院大學國語國文學會誌』58，pp. 1-19.
禹昊穎（2015c）「複数形の用法をめぐる考察― Jespersen の “normal plural” と “plural of approximation” の分類から―」『동북아문화연구』43，pp. 249-268.
禹昊穎（2015d）「畳語の諸機能」『人文科学論集』24，pp. 25-57.
禹昊穎（2015e）「韓国語における複数表示 *tul* の出現環境をめぐって」口頭発表，日本エドワード・サピア協会第 30 回研究発表会（2015 年 10 月 24 日，学習院大学）
大江三郎（1972）「数と数の一致」『英語青年』117-12，pp. 21-23.
加藤泰彦（1999）「サピアの『言語』における Economy の概念についての覚え書」『研究年報』13，pp. 61-65.
金田一春彦（1988）『日本語　新版（下）』岩波新書.
本多啓（2013）『知覚と行為の認知言語学―「私」は自分の外にある―』開拓社.
松本克己（1993）「『数』の文法化とその認知的基盤」『言語』10-22，pp. 36-43.
三輪伸春（2014）『ソシュールとサピアの言語思想―現代言語学を理解するために―』開拓社.

［欧文文献］

Carroll, John M., Michael K. Tanenhaus. 1975. “Prolegomena to a Functional Theory of Word Formation.” *Papers from the Parasession on Functionalism*. (eds.) Grossman, Robin E. et al. Chicago: Chicago Linguistic Society, pp. 47-62.
Kato, Yasuhiko. 2008. “Economy in Language and its Equilibrium: Sapir, Grice, and Horn.” *Bulletin of the Edward Sapir Society of Japan*, no. 22, pp. 35-46.
Martin, Samuel E., Young-Sook C. Lee. 1969. *Beginning Korean*, New Haven: Yale University Press.
Martinet, André. 1962. *A Functional View of Language*, Oxford: Clarendon Press.〔田中春美・倉又浩一（訳）『言語機能論』みすず書房，1975〕
Martinet, André. 1970. *Éléments de linguistique générale*, Libraire Armand Colin, Paris.〔三宅徳嘉（訳）『一般言語学要理』岩波書店，1972〕
Par les Missionnaires de Corée de la societe des Missions Etrangeres de Paris. 1881. *Grammaire coréenne*, Yokohama: Imprimerie de C. Lévy et S. Salabelle (Echo du Japon).〔Ridel, F.C.〕
Ramstedt, G, J. 1939. *A Korean Grammar*, Helsinki: Suomalsis-Ugrilainen Seura.

Sapir, Edward. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*, Harcourt, Brace and Company, New York.〔安藤貞雄（訳）『言語―ことばの研究序説』岩波書店，1998〕

Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*, Payot, Paris.〔小林英夫（訳）『言語学原論』岡書院，1928；『言語学原論』改譯新版，岩波書店，1940；『一般言語学講義』岩波書店，1972〕

Song, S. C. 1975. "Rare Plural Marking and Ubiquitous Plural Marker in Korean", *Language Research* 11: 1, pp. 77-86.

Underwood, H. G. 1890. *An Introduction to the Korean Spoken Language*, The Yokohama Seishi Bunsha.

［辞書類］

大阪外国語大学朝鮮語研究室（1986）『朝鮮語大辞典　上巻』角川書店.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（1996）『言語学大辞典』第 6 巻、術語編．三省堂.

国立国語院『標準国語大辞典』WEB 版 http://www.korean.go.kr/09_new/index.jsp

두산동아 사서편집국（2011）『동아 프라임 한일사전 제 2 판』두산동아.

日本学術振興会（1997）『文部省 学術用語集 言語学編』丸善.

한글학회（1991）『우리말큰사전』어문각.

Martin, Samuei. e. et al. 1967. *A Korean-English Dictionary*, Yale University Press.

安田吉実・孫洛範（1999）『民衆 엣센스 韓日辞典』民衆書林.

［用例出典］

・用例引用の際、末尾に〈　〉で示した「略号」を用い出典を表記する。

［韓国語の小説］

①신경숙（2008）『엄마를 부탁해』창비.　〈엄마〉

②공지영（2009）『도가니』창비.　〈도가니〉

③이문열（1987）「우리들의 일그러진 영웅」『1987 년도 제 11 회 아상문학상 작품집』 문학사상사, pp. 11-86.　〈영웅〉

［日本語訳］

①安宇植訳（2011）『母をお願い』集英社.　〈母〉

②蓮池薫訳（2012）『トガニ』新潮社.　〈トガニ〉

③藤本敏和訳（1992）『われらの歪んだ英雄』情報センター出版局，pp. 9-107.　〈英雄〉

ENGLISH SUMMARY

A Study on the Occurrences of the Plural Marker "*tul*" in Korean Relating it to the "Economy Principle"

WOO, Daeyoung

This study examines the meanings and uses of the plural marker "*tul*" in Korean and focuses on where it occurs in a sentence.

As "*tul*" is said to have three meanings and uses, namely as a suffix, an auxiliary particle, or a dependency noun, this morpheme has been abundantly studied from various viewpoints. However, the following issues have not been thoroughly examined in studies in the field of its occurrence. Song, Seok-choong (1975, 1993) explains that "*tul*" does not directly follow the subject of the sentence; furthermore, by employing the concept of "plural marker copying", Song shows that the subject is plural. However, Song did not touch upon the cause of stylistic variations that occur due to this phenomenon. In addition, although linguists such as Lee, Hi-seung (1955), Im, Hong-pin (1979), and Baek, Mi-hyun (2002) take the position of recognizing the phenomenon by which "*tul*" appears with almost all components in a sentence, that is, what can be known as "*tul*'s maximal expansion". This paper aims to examine whether this phenomenon is possible. Furthermore, it aims to investigate the validity of the analysis made be Suh, Choeng-soo (1996) that "*tul*" associated with elements other than the subject is deemed redundant in a case when the chain between the subject and "*tul*" is not omitted.

Through a thorough examination, this study examines the above-mentioned issues by relating them to an "economy principle" that is seen in human language.

Key Words: Korean, plural marker "*tul*", copying, economy of language, emphasis